[資料紹介]

沖縄出身米留経験者の台湾疎開
――伊志嶺朝三オーラルヒストリー――

菅野 敦志

はじめに：調査目的と概要

本資料は沖縄在住で台湾経験を有する人物へのインタビューを基にしたオーラルヒストリー集の一部である。

独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(A)（海外学術調査）「日本敗戦と新しい国境による台湾・沖縄の変容の口述歴史に基づく研究」（課題番号：25257009）では、研究代表者の栗原純および研究分担者の所澤潤を中心とするオーラルヒストリーの採集・記録の蓄積を精力的に進めてきた(1)。

オーラルヒストリーは、語り手にとっての個別の史実をどのように一般化できるかという課題について、証言をいかに記録化するかと同時に、証言の批判的な読みが必要となってくる点がしばしば指摘される。しかし、現在においても、日本の植民地であった台湾で実際に人々がどのような環境の中で日常の生活を営んでいたのか、「内地人・沖縄人・本島(台湾)人」の関係性や相互の感情にはどのようなものがあったのか、彼らが戦後お互いにどのようなつながりを有していたのか等、当時(あるいはその後)の状況が十分明らかにされ尽くしたとは言い難い状況にある。

そのようななか、戦後70年が経過し、かつて日本が有していた植民地での生活経験者の聞き取りにはもはや時間的余裕が残されておらず、公の記録には残されることの少ない人々の生活経験を一次史料として記録し、蓄積を進めることが急がれている。このような問題意識の下、これまでの研究グループによるオーラルヒストリーの成果を基に、筆者は研究分担者の一人として、沖縄出身／在住者で台湾での居住・生活経験を有される方々へのインタビューを実施してきた。本資料はその成果の一部として位置づけられるものである。

本インタビュー記録は、伊志嶺朝三氏のオーラルヒストリーである。伊志嶺氏は、1933年(昭和8年)に沖縄の宮古島に生まれ、1944年、国民学校五年生の時に一年間の台湾疎開

(1) プロジェクトグループによるこれまでの一連の成果は、『台湾口述歴史研究』シリーズとして、2016年3月に第19集まで出された。編集：台湾オーラルヒストリー研究会、発行者：東京女子大学 栗原研究室。

DOI : 10.14943/jbr.7.71

を経験した。台湾疎開とは、第二次世界大戦中に日本の戦局が悪化した1944年に実施された沖縄から台湾への戦時疎開(約一万人)のことである[(2)]。それら疎開者には、台湾にいる家族や知人を頼って渡台した「縁故疎開」と、台湾に身寄りのない人々が集団で渡台した「集団疎開」があった[(3)]。伊志嶺氏は前者の「縁故疎開」に該当するが、宮古島・八重山諸島からは、特に距離的な近さもあり、数多くの疎開者が海を越えて台湾に渡った。

伊志嶺氏は台湾で終戦を迎え、終戦から約一カ月で台湾から沖縄・宮古に引き揚げた。引き揚げ後は、平良第一中学校、宮古高校、名護英語学校、大学進学などを経て「米留」(1949年から1970年までガリオア資金を用いて実施された米国留学制度)試験に合格、ハワイ大学大学院での留学から帰国した後は琉球開発金融公社などでの勤務を経験された。

伊志嶺氏の台湾疎開は約一年間に過ぎない。しかしながら、台湾で初めて経験することとなる異文化体験の衝撃、戦後に経験することとなる疎開時代の隣人との再会、米留時代の同級生との台湾での再会など、短い台湾滞在経験であっても、その後の氏の人生における人的つながりと空間的広がりの土台を形成することとなった一面は見逃せない。

本資料は、沖縄と台湾の人の移動とそれにまつわる個人的体験について、特に日本敗戦前後の激変期にあった台湾で実際に各個人がどのような生活を経験されてきたのか、敗戦による国境の変容は人々にどのような変化をもたらしたのか、そうした生活体験の聞き取りを記録化し、研究の一助とすることを目的とする。そのため、個人の経済的・政治的成功の軌跡を跡付けるためのオーラルヒストリーではなく、日本統治時代の台湾で人々がどのように生活されてきたのかを記録化することに主眼を置くものである。

インタビューは関係者の紹介を受けて可能となり、記録の公開についてもご本人から了承を得たうえで、2015年11月25日、場所は那覇市若狭公民館にて実施した。なお、文中で括弧書きがある部分は筆者による補足説明である。

1．幼少期の環境と家族構成

菅野　お生まれになって、小さい頃からのお話を順番にお聞かせ願えればと思います。まずはお生まれになった場所についてお聞かせください。

伊志嶺　生まれたのは宮古島平良という所でして、宮古には製糖工場があったんですよね。で、製糖工場の製品を、砂糖を積み出すための港があって、そこを管理したりする事務所があったんですよ。沖縄製糖宮古工場と言ってましたけどね。台湾に行くまではそこ

(2) 台湾疎開については、疎開の方針が決定された1944年7月から疎開者の引き揚げが完了した1946年5月までの1年11カ月を、三名の帰還者の語りと公的資料を用いて丹念に検証した、松田良孝『台湾疎開：「琉球難民」の1年11ヵ月』南山舎、2010年に詳しい。

(3) 松田良孝によれば、疎開者の統計には若干のばらつきがあるものの、唯一出身地や疎開先を示した資料である「沖縄県疎開者調」に、縁故疎開4,369人、集団疎開8,570人で合計12,939人の記載があり、その内訳としては、最も多いのが宮古(4,892人)、続いて八重山(2,171人)、その他が本島(1,507人)であった。同上、49–53頁。

で生活していたんですね。で、そこは積み出し場ですから、海のすぐそばで。対岸には伊良部島とか池間島とかが見える絶景のスポットでしたね。台湾には小学校五年の半ば頃行ったんです。

菅野　お生まれになった年は。

伊志嶺　昭和8年です。平良市第一小学校という所に入学して、五年の途中まで生活しておりました。で、戦況が悪化してきたもんですから、沖縄本島[の人] (4)は大体九州とかに疎開して、宮古八重山は距離が近い台湾に疎開するのがパターンだったんですね。それで台湾に行くことを勧められて、製糖工場にいた父も「それがいい」ということになって。

で、私の長子が台南の台南高等工業学校にいたもんですから、そこの二年、三年次でしたか。そこに兄もいたもんですから、何かと都合がいいということで台湾に行くことになったんですが。父親は製糖工場を残って守らんといかんっていうことで、親を面倒見るのは母ですから、母と二人、そして末っ子がいたんですが、末っ子を手放すわけにはいかないということで、両親と末っ子だけ台湾に行かないで宮古に残ったんですよね。そういうことで、三人置いて、きょうだい四人、男二人、女二人が台湾に行きました。

2．宮古から台湾へ

菅野　台湾には宮古から船で行かれた時の思い出とかはありますでしょうか。

伊志嶺　台湾には小さな駆動船で行って、西表島で一泊して休んで、基隆に行った。覚えてるのはね、激しい船酔いですよ。激しい船酔いにやられてね、生きた心地がしなかったですね。

菅野　どれ位の[大きさの]船だったでしょうか。

伊志嶺　まぁ、100トンはいかないでしょうね。先ほどお話ししたように、西表の船浮でね、向こうで少し休んで。向こうは「天然の良港」といわれている所ですよね。そこから出て、与那国を通って。向こうも三角波、ものすごい揺れる所で有名なんですがね。そこで船酔いして、そしてお腹空いてるから、乾パン、それを食べたんだけれども、一口食べた途端に戻したりしてね。それで乾パンは戦争終わって帰ってきて、十何年も食べられなかったですね。今は食べられるけどね。いやーひどい船酔いしました。帰りもそうです。

で、基隆に着いたら、台南工業にいる兄貴が迎えに来て再会した、ということです。そして面白いことにね、兄貴の第一声は「あまりしゃべるな」と。「平良の言葉は台湾で、日本人が使ってる言葉とは違うから、バカにされるから言葉はあまりしゃべるな」と。「しばらく慣れてから話すように」ということを強く言われたんですよ。

菅野　初めて基隆に降りられた時の印象はありますか？

伊志嶺　それがね、ないです。さっき話したようにね、兄貴が「あまりしゃべるなよ」

(4) 角括弧内は筆者による発言内容の補足を示す。以下同様。

と。(笑い)あの一言だけ覚えていますね。

そしてその後、私たちは高雄[州の]、恒春ですね。恒春にいとこが住んでましたんで、そこに半年位住んでましたね。高雄っていう港は軍港なんですよね。私たちがいる時も軍艦がやられてね、一日中かもっと長い時間、軍艦が燃え続けている光景を目の当たりにしたんですけどもね。そういうことで、せっかく宮古からね、「台湾が安全だ」と[言われて]来た所が危険な場所になった、ということですね。

で、私の姉はそこの小学校の先生してたもんですから、そこの宿舎に家族四人住まわせてもらったんですね。長女は学校の先生、次女が台北の高等女学校に入学し、兄は高雄中学校かな、一中か二中か。私は高雄の小学校に入って、そこでしばらく生活していたんですよ。何しろ、戦時中ですからね、非常に物資が不足して。私どもは、薪もないからね、練炭を。高雄で作ってる所がありましたんでね、練炭買って、それで火を起こして食事する、ということですね。

食べ物もそれほどないんでね、そこで台湾人が行商に来る。卵売りにね。で、「卵、交換、交換！」って、卵と着物を交換する、って[具合で]ね。姉は学校の先生していて着物を沢山持っていたし、かなり裕福だったんでね、着物をいっぱい持っていったんですがね、台北にいる間に一枚一枚着物が減っていくのを目の当たりにしてね、非常に悲しい思いをしたのを覚えてますね。それでも姉は少しも不満を言わずにね、自分のきょうだいたちを支えるために惜しげもなく着物と食料を、鶏とか卵とか豚肉とかと交換して、それで私たちを養ってくれた。そういう思い出がありますね。

菅野　そうした物々交換はいつ頃でしたでしょうか。

伊志嶺　それは台湾に行ったのが昭和19年の半ば頃ですよね。台湾に疎開したのは。

菅野　それは何月頃だったでしょうか。

伊志嶺　8月か9月頃ですかね。そんなに寒い時ではなかったですからね。そういうことで、ただその頃は戦況が悪化してるもんですからね、小学校行っても、授業もあまりないしね、あまり勉強したって記憶はないんですね。で、その後ですね、戦況が非常に悪化してきて、もうこれ以上台湾に住むのは危険だ、ということでですね、台中州の豊原っていう、その頃は台中州の豊原でしたけども、戦後は独立して豊原県になったのかな。豊に原ですが。そこに行って疎開したんですがね。幸い姉はそこの小学校の、小学校っていっても日本人の小学校ですけどね、そこで職を求めて就職できて、姉の給料で一家生活できたということです。

菅野　宮古にいらした時には、台湾っていうのはどういう所だと周りから聞いて、どういうイメージを持たれていたでしょうか？

伊志嶺　台湾ってね、あんまり考えたことなかったですね。ただ、台湾にも製糖工場があって。宮古の製糖工場とね、姉妹工場っていうのかなぁ。それと兄貴が台湾にいるとい

うことで、憧れの土地ではあったんですよね、台湾は。

なぜかっていうとね、台北高校、昔の高等学校というのは沖縄からね、高等師範は初代の知事、屋良[朝苗]さんが行っていたしね。もちろんその頃はそういうことはわかりませんよ。わかりませんが、台北医専とかね、台北大学(5)の医学部とかね、その卒業生が宮古で開業しているとか、あるいは宮古に来て、どっか東京に行ってあるいは内地行って開業しているとかいう話は聞いたことあるんでね。沖縄にはもちろん医学部、医専はないし、高等工業もないし。それが台湾にはあって。皆がそこに憧れて入っていく、ということで。だから、「憧れの的」でしたね。

生活的にはね、何ていうかね、宮古から福建に朝貢に行って、そこから宮古に帰る途中台湾で遭難して、60何名かでしたか上陸して、高砂族かな、首切られてっていう事件がありましたよね。

菅野　台湾遭害事件ですね。

伊志嶺　そう。それをきっかけに日本が台湾に侵攻して。日清事変の発端となった事件でもあったわけですけれども、台湾併合のきっかけとなった。ちょこっとそういう話を聞いたりしてね、台湾には「生蕃人」がいる、と。「蕃族」がいる、と。危ない所だ、という話はね、よく聞かされていましたよ。首切り族がいるとかね。そういう話を聞いていましたね。だから両極端ですよね。「生蕃人」の首切り族がいる国っていうのと、学問的に優れた、台北[帝国]大学ね、台北師範、台北高専、色々とそんなのがあって。割りと沖縄の優秀な、特に宮古のね、優秀な連中がそこに行って勉強してると。そういう話聞いて、憧れの地でもあったわけですね。おまけにうちの兄貴も台南高等工業に入学して。

菅野　台湾に進学となるとお金も必要だったんじゃないでしょうか。

伊志嶺　そうですね。だから、[父は]沖縄製糖の宮古工場で割と高い地位にあって、給与も割りとあったんじゃないでしょうかね。そして割りと裕福な生活をしていましたからね。

3．台湾での疎開生活

菅野　お姉さまはどちらの小学校に就職されたんでしょうか。

伊志嶺　学校の名前まではわかりませんね。豊原尋常小学校じゃなかったかと思うんですがね。で、その時に思いがけずね、私たちが疎開していた所に、台湾人のね、一角を借りて住んでいたんですが、そこに親父が来たんですよ。宮古から船で。で、来た理由は、子どもたちを四人送ったのに、どうして生活してるのか心配でちょっと様子を見て、またすぐ帰るからってことで、ひょっこり現れたんですね。けれども、もうどんどんどんどん戦況が悪化していって、船も出なくて、とうとう宮古に帰れなくなって、そのまま台湾に

(5) 台北帝国大学のこと。なお、台湾総督府医学専門学校、台北医学専門学校の通称は台北医専。

残ってわれわれと一緒に生活したんですね。

それで、宮古には母親と妹が残っていて、父はもう台湾に来てわれわれと生活した、と。で、台湾の製糖工場かな、そこで守衛の職を得てね、働いてね。姉の給料と親父の給料で私たちはあまり困らなかったですね、生活は。その当時は日本人の学校と台湾人の学校は違う。あれは公学校といって違うんですよね。で、私は小学校。それでね、台湾の子どもたちと仲良くなったとか遊んだっていうことは、記憶はあまりないんですね。

ただね、台湾人の家主と子どもがいるわけですね、その人たちとは非常に仲良くなりましたね。仲良く遊んだりしていました。

菅野　どの位の年齢だったんでしょうか。

伊志嶺　年齢はね、かなり上でしたね。五〜六歳くらい違う、兄貴分だったんですよね。で、台湾人とは何のトラブルもなかったしね。やっぱりやまとんちゅ[(6)]は台湾人をさげすむようなこともあったんですよ。で、沖縄のわれわれはね、そういうことはなかった。割と親しげに思ってね、接することができた、そういう感じがしますね。

でね、台湾の子どもたちとも何名か遊んだけれども、そうですね、一度どっか道を歩いてるとね、台湾人の子どもたちが来てね、「おい、琉球琉球」と言ってね、ちょっとバカにするようなね、態度で言っていたのをかすかに覚えていますね。まぁこれは一回だけそういう記憶があったんでね、大したことはなかったけどね。

菅野　それはどういう場面で。

伊志嶺　道を歩いておって。「沖縄から来たよ」と。そこに宮古から疎開してきた連中が集団で生活してるわけですよ。集団疎開ですから。で、私どもは集団疎開ではなくて単独の疎開で来たからね、生活も別なんですね。で、向こうの集団の人たちはあまり標準語も使わない、宮古の方言でおっきい声でしゃべる。で、非常に貧しい。そういう単位でね。だからまぁ、ある程度、ちょっとバカにされるようなね、されてもしょうがないかなと思うような所もあったんですよね。

ただ、そこの周囲には日本の専売公社とかね、豊原の事務所があって、事務所長やその娘とかがいて、割りと仲良く遊んだ記憶がありますね。で、一番楽しかったのは、後ろを大きい川が流れてるんですよ。そこで泳いだりね。そして、台湾人たちは食用の蛙をですね、あっちこっちで探してきてね、それを食べたりね。それを餌にして魚釣ったりしていましたね。魚は焼いたり、お汁に入れたり。

一番怖い思い出はね、向かいの台湾人何名かがね、猿を捕まえてきてね、脳をバシッと斬って、脳ミソを食べるんだよね。どうしてそういうことをしたのか、そういう食習慣があったのかはわからんけども、脳を食べたら体にいいとか、そういうような迷信があったのかなぁ。そういうのが一つだけ怖い経験として覚えてますね。

(6) 内地人、つまり、日本本土出身者のこと。

菅野　それは漢民族の人たちですよね。

伊志嶺　漢民族だね。もちろん中国から来たけれども台湾に長いこと住んでる。

菅野　その当時は福建と広東といわれていた・・・。

伊志嶺　そうですね、言葉も、「ゴァームザイアー」(7)、「リー、ジャパァボエ」(8)とか、「ボゥラー」(9)、「ボアキンナー」(10)とか言って遊んでましたね。

菅野　かなり覚えられたんですね。

伊志嶺　覚えてちょこちょこ台湾語で話したりしたけども、最近残ってるのはこれだけですね。(笑い)

菅野　そうした台湾人のお友達は、近所に住んでいたので自然に仲良くなった・・・。

伊志嶺　そうですね。しばらく歩いていくと宮古から疎開してきた小学校の同級生がいたんですけどもね、そこまでは遠くて遊びに行かなかったですね。

菅野　どれ位遠かったんでしょうか。

伊志嶺　一キロあったかな。そんなもんですかね。

菅野　集落が違う・・・。

伊志嶺　そうそう。そしてね、住んでいたのは台湾人の家の離れを借りて住んでいたんですが、割と広い住宅でね。そこでね一緒に防空壕を作って、台湾の人たちと。何かあったら一緒に入って、っていうのはあったりしたかな。

で、割とね、戦況は悪化していたんだけども、食べ物には困らなかったですよ。高雄、恒春にいる時に、着物と卵を交換するというようなこともなくね、金出せばお米も買えたし、それから向こうは、沖縄には梅はないけれども、台湾には、高山に行くと梅ができるんですね。で、梅の実を売りに来て。それを買って梅干しを漬けたりね。そして赤シソ買ってきて、あるいは道に生えてるのとってきて梅干しと漬けて食べたりとかね。食べ物はそんなに苦労した覚えはないですね。

菅野　どのような食べ物をよく食べられましたか？

伊志嶺　玄米。瓶に玄米入れてね、突いて皮取って食べた覚えがありますね。

菅野　他に食べ物はどうでしたか。

伊志嶺　食べ物は何を食べたか覚えていないんですけどもね、お腹空かせてたって記憶は全くないしね。果物はありましたね。竜眼はあったし、桃はありましたよね。それからバナナもありましたね。あんまり覚えてないね。

あとね、学校ではね、修身の時間なのかな、沖縄の久松五勇士の話がね、修身の本か何かに出てたんですよね。で、先生が、私たちが宮古から来ているってことを知っているも

(7)「私は知らないよ」の意。
(8)「あなたご飯食べましたか」、転じて、「元気ですか」の意。
(9)「無いよ」の意。
(10)「大丈夫」、「気にしないで」の意。

んですから、「お前たちこの話知ってるか」、「はい、知ってます」ってね。その時に非常に誇らしい気持ちになったのを覚えてますね。

で、台湾にいる他の日本人の子どもたちとはね、何のトラブルもなくて、仲良く生活した覚えがありますね。

で、そのうちに空襲があるんですよ。空襲があって、宮古から集団疎開して来ている人たちの近くで爆弾が落ちて、何名か怪我したり。死んだ人はいたのかなぁ。怪我したりして。そして、大きな物がゆらゆら落ちてくるもんだからね、「あー爆弾だー！」って言って見とったら、ジュラルミン製の燃料タンク。戦後はあちこちにそれが落ちていてね、宮古でもそうだったけどね、それでボート作ったりしてね。そういう思い出がありますけどね。ジュラルミンが落ちてきて、空襲で爆弾が投下されて。

菅野　そのボートというのは模型のボートですか？

伊志嶺　いやいや、実際の、本物のボート。これを切って乗って。カヌーみたいな感じでね。これで漁に行ったり。色々とやってました。

しかし、それほど街が焼けるとかね、そういったようなことはなくて。火災になるとかね。一回だけ集団疎開の辺りが火災になったってのはありましたけども。そこだけであって、後はもう皆平穏無事な生活を送ってましたけどね。

で、台湾では小学校五年から六年に進学して、そこで8月の終戦までね、そこで住んでいたんですが。で、台中市にも私のいとこが住んでいてね、それで台中まで電車でね、遊びに行って、一泊二泊して帰ってくるとかね。そんなに戦局は激しくなかった気がいたしますね。それから嘉義って所にやはりいとこがいたんで、そこまで遊びに行ったりっていうね。だから割とね、苦労したっていう記憶がないんですよね。高雄にいる時だけね、ちょっと食料に困った覚えはあるけれども、それは姉が一枚一枚自分の着物を食べ物と交換して手に入れてくれたんでね。

菅野　台湾で一番楽しかった思い出はありますでしょうか。

伊志嶺　楽しかった思い出、そうですね、川が近くに流れてるから、そこで魚釣ったり泳いだりしたのが楽しい思い出ですね。

菅野　台湾人のお友達と。

伊志嶺　そうですね、近くのね。で、専売公社の支店長がいて、その家に招かれてね。ご馳走食べさせてもらったりね。向こうは裕福ですからね、こんな食べたことないようなご馳走を食べさせてもらったりして。それも楽しい思い出だし。

それからアヒルかな。長い竿でこうして誘導して、台湾の人たちが歩くんですよね。それを手伝ってね。私も、「させてくれ！」って言って。何十羽っていうアヒルを檻まで誘導していったりね。そういうたわいない遊びが。

もう勉強した覚えはないしね。後はまぁ、たらいに水を入れて置いておくと熱くなるから、あったかなるから、それで行水して、っていう思い出もありますね。

菅野　逆に一番悲しかったことは印象にありますか？

伊志嶺　悲しかったことはないですね。戦争に負けてもね、終戦の玉音聞いても別に悲しいって思いなかったしね、子供の頃ね。

菅野　終戦の時に、台湾の方が以前高圧的だった日本人に対して報復処置をとったっていうことはよく言われるんですが。

伊志嶺　そうそう、聞きましたね。

菅野　戦争が終わった後の色んな「転換」、世の中が変わったことについて何か思い出はありますでしょうか。

伊志嶺　あのね、台湾の人とはね、[沖縄出身者は]悪い関係にはなかったですね。あるいはね、向こうもね、おそらく[沖縄出身者を]日本人とは区別して接していたと思うね。「琉球」って。おそらくそんな感じじゃなかったかと思う。だからこちらも高圧的な「台湾野郎」とかね、そういうのは全くないし、向こうもくってかかることは全くないし、学校では別にヤマトの子どもたちからいじめられたりっていう記憶はないし、割とうまくやっていたんじゃないかな。

菅野　ヤマトの子どもたちはどこら辺出身が多かったとかは・・・。

伊志嶺　いや、全然わからんですね。どういう所に勤めていたんだろうな、親はね。鉄道関係、学校教員ね。教員も、公学校の教員も日本人ですよね。だから教員も多いし。で、僕の姉はオルガン、ピアノが上手だったからね、割りと学校では皆から親しまれて。「どの歌を弾いてくれ、あの歌を弾いてくれ」ってね。親しまれていた記憶がありますね。

だからね、あんまり鮮やかな記憶っていうのがそれほど・・・滞在期間が短かったし、戦時中で。でも学校が休校になったりってのはないから一応は学校には行っていたんだけれども。

4．終戦から引き揚げまで

菅野　終戦はどのようして迎えられたんでしょうか。

伊志嶺　まぁそこ(高雄)[11]で終戦を迎えて。皆運動場に集められてね。天皇陛下の詔勅を聴いたんですよね。何が何だかわかりませんよな。もう戦争負けたんだと。

菅野　ラジオでですか？

伊志嶺　そうそう。ガーガーガーガーいって誰もわからないし。まぁ、子どもたちは何が何だかわかりませんからね。

菅野　戦後、言葉はどうでしたか。学校で北京語を教えられたりってのはありました

(11) 丸括弧内は筆者による発言内容についての説明を示す。以下同様。

か。

伊志嶺　それは全くわからないですね。学校での生活が変わったのはね、それから毎日中華民国の国歌をね、教えられるんですよ。ちょうど蒋介石の軍隊が台湾に来るんでね、それを皆で迎えんといかん、って。

（中国語で歌を歌う）

三民主義（サンミンージューイー）　吾党所宗（ウーダンースオゾォンー）
以建民国（イージェンーミングォー）　以建大同（イージェンーダートォンー）

って歌をね、教えられて。これはもう、70年経った今でもね、覚えてますけどもね。

菅野　中華民国の国歌は覚えられて。

伊志嶺　そうそう。孫文のね、三民主義の歌ですからね。それと、青天白日旗の旗をね、毎日もう何枚も何枚も描いて。丸いお椀で。

菅野　どうやって描かれたんでしょうか？

伊志嶺　クレヨンがあるからね。丸いお椀を伏せて、丸を描いてね。で、星みたいのを描いて。後はクレヨンか何かで色付けて作ったんです。小旗でね。竹に挿して、こう迎える、という。

菅野　画用紙、紙にですか？

伊志嶺　紙ですね。それを振って、中華民国軍が来るっていうから見たら、もうーーーみすぼらしい格好をしてね。（笑い）裸足で、そして何かモッコ担いだり、帽子被ったりしてですね。それが兵隊とはね。われわれは日本の兵隊しか見てないですからね。凛々しい軍隊の姿しか見てないですからね。

菅野　モッコというのは・・・。

伊志嶺　モッコというのは、竿にね、両端に・・・。

菅野　天秤棒ですか。

伊志嶺　天秤棒ですね、そうそうそうそう。それ（中国兵）見て、これ（旗）振る気にもならんですよね・・・もうひどい・・・。

菅野　どこに出迎えに行かれたんでしょうか？

伊志嶺　いや、道路に出て、外を見ただけですね。豊原の街の中でね。

菅野　学校の近くで。動員かけられて・・・？

伊志嶺　そうそうそう、近くだと思いますね。で、豊原にいた時、あるいは高雄にいる時に、日本軍の兵隊っていうのはあまり見かけなかったですね。高雄にいる時はね、ドイツの軍艦が撃沈されて、ドイツの兵隊が上陸して高雄の市内を歩いてるのを見たんですけどね。この、白人を見るのは初めてですよね。高い鼻と青い目の。「え、これが人間か！」

と。(笑い)思うようなね。初めて見てね、ドイツ人を。びっくりしたのを、かすかな記憶に残ってますね。学校からの帰りからだったかと思いますけどね。

菅野　どのような格好でしたでしょうか。

伊志嶺　普通の白い水兵の格好だったと思いますね。帽子被ってね。

菅野　それは同盟国だったから・・・。

伊志嶺　そうですね。三国同盟ですからね。手厚くもてなして帰したんでしょうけどもね。沖縄で米軍が来て占領したでしょ。沖縄の人はそれ見て大変な思いしたと思いますけどね。

で、[豊原では]日本軍の軍隊もいなかったしね、沖縄では学校は皆兵隊に占拠されてね。どっかで勉強したりしたけども。学校を日本の軍隊が占拠したりすることもないしね。通常通りの勉強、授業を受けていた、ですね。

後はね、もちろん空襲があるからね、皆防空壕掘るわけですよね。大きい防空壕掘って。で、空襲警報が鳴ったら、持ち出す荷物を皆家から出して、防空壕に入れたら狭くなるからね、家の目の前を小さな小川が流れてるんですよ。小川のそばに皆荷物を置いてね。敵機が来たら川に落として延焼を免れるっていうようなね。だから、「空襲警報ー！鳴ったー！」って言ったら大急ぎで、私小学校六年生ですけれどもね、担いで。河原、小川のそばに、両サイドに置いてね。

しかし、先ほど申し上げたように、空襲を経験したのは一回だけで、後は何の被害もなかったですね。後は戦争終わって、沖縄から疎開してきた人たちは、今度は疎開船で何カ月後かには帰るんだけれども、私どもは親父がね、もう早々と帰りの船を見つけて、基隆まで行って、基隆から船に乗って宮古に帰る、となったんだけれどもね。で、帰って、これが9月頃ですね。台南工業に行った兄貴も一緒に帰ろうってことになったんだけれども、「いや、卒業があるから、一応それを済ませてから」っていうんで、それを待って11月の初め頃に帰ることになって、栄丸という船に乗ったんですがね、栄丸って船が港から沖に出た途端に沈没して(栄丸事件)[12]。兄貴はそこで亡くなった、ということですね。

泳げない子どもたちが助かって、十分に泳げる人たちが亡くなるっていうね。皆すがってくるわけですよね。泳いでる人に。で、助けようとして、もがいて死んで。子どもたちはまた誰かが助けるっていう。その時に、11月の1日かなぁ、兄貴は栄丸っていう遭難事故があってね、そこで亡くなりましたね。悲しいことですけれども。平和の礎に名前も刻まれていますけどね。

宮古に帰ったら学校に復学して、翌年の3月に小学校卒業して中学校に入る、と。

(12) 栄丸事件とは、1945年11月1日に台湾から宮古に向かった引揚船が座礁し、多数の死者が出た遭難事件である。松田良孝によれば、事件の全容は未だ明らかではなく、『沖縄県史』では乗客数は「127人」、「172人」、「183人」との記述で統一されていないが、犠牲者数については100名以上であったことは確かなようである。同事件についての詳細は、次を参照されたい。松田、『台湾疎開』(前注2参照)、第6章。

そして帰る時が、ちょっと印象に残っているのはね、空き家がいっぱいあったんですよ。港の近くにね。空き家を無断で借りて、水道もあって、水道が流れっぱなしでね。だから、住むのも不自由しないし、水も不自由しないし。食事はどんなして手に入れていたのかわからんけれども、あまりお腹を空かせていたという記憶もないからね。

で、それに引き換え宮古帰ったらね、宮古は水道がないでしょ。で、私の家は海のそばですからね、海の近くの井戸というのは海水が混ざっていて飲めないんですよ。だからずーーーっと遠くまでね、水汲みに行かんといかん。あるいはね、「ムルガー」といってね、鍾乳洞の大きなね、穴があってね。沖縄ではこういうの「アブ」っていうんだけどね。降りていったら水があって、そこから水を汲んで階段を何十段も上がってきてそこからまた家まで。担いで帰る間にもう三分の一しか水が皆こぼれてなくなっててね。そういう辛い思いをしたけどね。

帰る時に基隆にいた時にはもう水道が流れっぱなしで。そりゃもう。(笑い)そういう水が豊富な所、水がない所・・・だから水道が行き届いていたからね、やっぱり基隆も大きな都会だったんですよね、港町で。高雄が西の良港、基隆が東の良港だったですからね。ただ、基隆は雨が多かったですね。雨が多い所で有名でしたね。

菅野　社寮町[13]とか、沖縄の方が沢山お住まいになられていた所があったそうですが。

伊志嶺　帰る時に一時そこ(基隆)に立ち寄って待っていただけだからよくわからんし。おそらくそこの社寮町の人たちも帰りは一緒だったかもしらんがね。何十名か一緒に帰ったわけだからね。

菅野　[引き揚げの際に]持ち物検査とかはありましたでしょうか。

伊志嶺　いや、ないない、ないです。

菅野　ヤミ船ではなかったですか。

伊志嶺　いや、ヤミではないです。ヤミはね、与那国に密貿易の拠点ができて、戦後しばらくは一万人位の人が住んでた。今は1,500名位だけれども。戦後はすごい大都会だったらしい。与那国は密貿易の拠点で。

菅野　引き揚げて帰られる時の船はどれ位の大きさでしたか？

伊志嶺　やっぱり[台湾に行った時と]同じ位だったんじゃないかな。漁船だったんじゃないかな。もう少し小さいかな、40–50トン位の漁船で。で、兄貴が乗った船はね、ずっと陸に引き揚げてね、そこに降り立ったんですよ。だから乾燥してね、あちこち隙間ができてたんですね。それで海に入れると沈んで。そういうのがあったですね。

(13) 社寮町(社寮島)とは、台湾北部の基隆にあった日本統治時代最大の沖縄人集落で、最盛期には約500–600人の沖縄出身者が居住していたといわれる。社寮島は現在「和平島」に名称変更されている。

5．引き揚げ後の生活と米留制度によるハワイ留学

菅野　台湾にいられた期間は一年・・・？

伊志嶺　一年足らずじゃないですかね。終戦後すぐ帰ったしね。8月の下旬か9月の初め頃帰って。台湾いたのはほぼ一年位ですかね。で、台湾から帰ってくると、桟橋に末っ子の妹とお袋が迎えに来てるわけですよね。皆もう裸足で色黒くなって、台湾からのわれわれはあまり苦労もしてないし、割と台湾では裕福な生活してたけどね、だけど[妹とお袋を]見たら、妹もお袋も、もう本当にみすぼらしいなりをしてるんでね。相当苦労したんだなーって、涙が出そうなね。あれになりましたね。そして、家も戦争で、空襲でやられて、妹と墓を移動して。どんなして飢えをしのいだかわかりませんけれども、でもまぁ飢えをしのいで生きていましたから。

菅野　宮古の家は。

伊志嶺　なかったですね。宮古の家は製糖会社の官舎だったんですよ。そこに住んでましたらからね、家賃は出ないし、連絡用の電話はあったんですがね、その頃電話があるのは20軒ほどしかなかったですよ。で、電話で色々やったりして。

製糖会社の上司からね、これは鹿児島の人なんだけども、薩摩焼、こんな大きいのいただいたんですよ。焼き物。丸い大きな壺ですね。これだけ後生大事に抱えて、それ抱えて逃げまどって。帰ったら家ももちろんなくて、どっかよその家借りて住んでたんですけれども。その壺は置いてありますね。今も私持ってますけれども。いやもう本当に高価な壺で、それを見る度にね、お袋が後生大事に抱えていたもんだな、と思い出しますね。

菅野　宮古では平良第一小学校にお戻りになられたんでしょうか。

伊志嶺　ええ、そう。その翌年に卒業して宮古中学に入学したけれども、学制改革があって、中学校がなくなって高等学校になるんですよね。それでそのまま高等学校に編入して高校生になるという一連の経過がありますね。

ほんのわずかな期間だし、沢山話すべきことがなくてね。そんなもんですかね。

菅野　引き揚げられて、高校卒業後はどのような進路を進まれたのでしょうか。

伊志嶺　高等学校を出て沖縄本島に行って英語の専門学校を半年位やって東京行って、帰ってきて米留試験ってのがありましてね、ハワイ大学に行ったんですよ。第一回目で。ちょうどね、ハワイが準州から州に昇格したんですね。あれは[19] 58年かな、57年かな。それを記念してハワイに。それまでは留学先はアメリカ本土の大学だったけれども、州になって昇格したんで、ハワイにも留学生を派遣する、ということになって。その前にハワイの沖縄県人会がね、何人か募集して沖縄から呼んだことはありますけどね。正式な留学生としては最初の留学生ですね。

菅野　それは何年のことでしたでしょうか

伊志嶺　[19] 59年ですね。59年から61年までの二年間。大学院ですね。

菅野　そうですか。高校は、宮古高校・・・？入学は何年でしたでしょうか。

伊志嶺　宮古高校ですね。[19] 51年に卒業だから46年に入学か。中学高校合わせて。あの時はね、六・三・三なんだけどもね、宮古の場合は六・二・三、あるいは六・三・二かな。中学高校合わせて五年なんですよ。沖縄本島は四年です。八重山はそのまま六年。沖縄内でも六・三・三の考え方に違いがあって、沖縄本島はもうすぐ中学に入って、学制改革になったらすぐ高校生になって。

菅野　その後進学されたのは。

伊志嶺　小さな大学だからね、それは省略して。

菅野　先ほどの英語の専門学校というのは。

伊志嶺　名護英語学校。名護に英語学校がありましてね。これは昔はね、琉大ができる前に沖縄英語学校と沖縄文教学校というのがありましてね。琉大ができると、この二つが英文学科あるいは文学部になったんですが、それがなくなった後、名護に沖縄(琉球)政府立の英語専門学校ができたんですよ。そこに入って。

菅野　名護英語学校には何年からでしたか。

伊志嶺　[19] 51年から52年ですね。

菅野　そしてハワイに行かれたのは[19] 59年から。

伊志嶺　[19] 59年から61年まで。行くまでは、名護英語学校で英語教えてたんです。「Teaching is learning」っていいますよね。教えることによって自分も英語が勉強できる、と。そして米留に備える、ということで、一年ちょっと位ね、名護英語学校で教えて。そして入学試験に受かってハワイに行った、っていうわけですね。

英語学校卒業してね、その後しばらくは宣教師の通訳。通訳探してるっていうんでね。その時は高校でも英語の授業[の仕事が]あったんですよ。宜野座高校からね、「代用教員で来てくれんか」っていう話があって。で、「宣教師の通訳もしてくれんか」って話があって。で、結局はまぁ、宣教師の通訳すれば、英語の勉強もできる、生きた英語が勉強できる、ということで一年半位ね、通訳しました。

菅野　この米留の試験はいつ受けられたんでしょうか。

伊志嶺　いつだったかな。行ったのは6月だから、[19] 59年に行ったんだよなぁ。59年の春頃受けて。行く前に半年位色んな講習ありますからね。ちょうど天皇陛下、今のね、と美智子妃が結婚した年(1959年4月ご成婚)。那覇から名護の行き帰りのバスで[ニュースを]聞いてましたからね。4月頃かな、そこでハワイに行って、何カ月位かなぁ。フルブライトの学生が皆ハワイに集まってね、そこで勉強したんですよね。ジョンソンホールとか。カレッジインっていう寮がありましたよ。大学の真向かいにあって、そこで生活して。その後は友人と、個人の離れを借りて、そこで生活していたんですがね。

菅野　ハワイでの専攻は。

伊志嶺　歴史です。「Oriental History」、中東史。三笠宮が学会の会長をしてね、その学会に参加したりしたことがありましたね。三笠宮が自分で早く来て、自分で皆[会場の]窓開けて、帰りは全部自分で閉めて帰るとかね。あーすごいなぁって。天皇陛下の弟君がね、そういうことするんだなぁって思ってね。

で、戦後しばらくしてね、[19] 62年、63年頃かな。台湾にたまたま会議で出張する機会があったんですよ。

菅野　その時はどのようなお仕事でしたでしょうか。

伊志嶺　[琉球]開発金融公社っていうね、Ryukyu Development Loan Cooperationっていう、これは米軍民政府の付属機関だけれども、これは金融公社だったんですね。そこにいたんです。

6．戦後の台湾訪問と旧疎開先での再会

菅野　ハワイ留学を経て沖縄で金融公社に就職されたんですね。

伊志嶺　で、東南アジアの農業金融会議っていうのがありましてね。で、こっちはペーペーの職員だけど、他の所からは次官クラスが集まってるんですよ。それと一緒にあちこち視察行ったりしてね。

それで台北から台中に行く途中にですね、見たような風景があるんですよ。そしたらね、昔住んでた家なんですね。「止めろー！」って言って乗用車止めて。そして、そこの家入っていったらね、[昔知ってた人が]いるんですよ。「オオ、ミヤコジマ、ミヤコジマ！」って。(笑い)もう名前は忘れているけど、宮古島出身ってだけは覚えとってね。「ミヤコジマ、ミヤコジマ！」って言って、もう手を取り合ってね、喜んで。で、それからまた台中に行ったっていう。

菅野　同い年位の方でしたか？

伊志嶺　いや、もうちょっと上の。

菅野　[疎開時に]近所で一緒に遊ばれていた友人で・・・。

伊志嶺　そうそうそうそう。そうだね、後は隣の家に竜眼、家の庭にね、竜眼が生えてるんだね。一緒に木に登って竜眼盗って怒られたりね。(笑い)怒られて、逃げて帰ったりした、台湾の兄貴分とね、そういう思い出もありますね。

菅野　よく覚えていらっしゃいましたね。台湾で再会されたのはいつ頃でしたでしょうか。

伊志嶺　そうですね。[引き揚げて]15–16年後ですからね、行ったのは。[会議で台湾に]行ったのは34–35 [歳]位かなぁ。僕がそうすると、「え、親父さんたちこんな歳とっていたかな」と。そして、一緒に遊んでいた兄貴分はあれはもうオジサンになってますからね。だから、よく覚えていてくれたと思いますよ。「At a glance」っていいますよね。一目見て。

皆総出で出てきて歓迎してくれましたからね。

ただ道で車を待たせてましたからね、いつまでもおれんから、早々と切り上げたんですが。まぁできれば一晩位一緒にいたいという思いがありましたね。

菅野　それは離れ難かったでしょうね。

伊志嶺　それで会議で台湾に行った時に映画観に行ったら、向こうは日本の映画しかやってないんですよ。で、「誰が好きか」って聞いたら、「ホウテンミン！」って。「ホウテンミン！」って誰かと思ったら、「宝田明」。（笑い）「宝田明、ホウテンミンが好きだ」って。

で、映画始まる前に皆起立して国歌歌うんですよね。今はもうそういうことないらしいんだけどもね。で一緒に大きな声で「三民主義（サンミンジューイー）～」って歌ってね。（笑い）

菅野　それはいつ頃だったでしょうか。

伊志嶺　［19］63年かなぁ。

菅野　日本の映画がブームだった頃・・・。

伊志嶺　そうですね、香港の女優がいたんですよ。きれいな。それといつも宝田明が恋人同士で。

菅野　その映画館で中華民国の国歌を歌われた時っていうのは、疎開でのご経験が役に立ったと・・・。

伊志嶺　そうですね。（笑い）あと、台湾に会議で行った時、台湾大学に行ったんですよ。そうするとね、どうも見たような人が来るわけですよ。見たらね、ハワイ大学で机を並べていた人なんですよ。（笑い）突いて口から出たのはね、「What a small world!」って。（笑い）「What a small world!」ってついその言葉が口から出て来た。（笑い）

菅野　それは外省系の方だったんですか？

伊志嶺　いや、白人です。机並べていた白人です。留学。台湾大学に。ハワイ大学を卒業して、奨学金もらっていたかわからんけども。ハワイの時に机並べて座ってたヤツですよ。（笑い）

菅野　本当に面白いエピソードですね。台湾にいらしたのはわずか一年という期間でも、その台湾経験というのはその後も大きな影響があったといえますね。

伊志嶺　ええ、影響を受けましたね。

菅野　疎開の時の台湾と、戦後の中華民国になってからの台湾と、どのような印象の違いがありましたか？

伊志嶺　戦時中の台湾は庶民ですよね。会議で行った時の台湾は、中国人はエリートばっかりですからね。これはまぁ、エリートと庶民の違い。（笑い）われわれが疎開した時の台湾人っていうのは本省人、もともと［日本統治時代から］台湾にいた人たち。会議で行った時は外省人(14)のエリートたち。［両者の間には］反目がありましたね。

(14) 戦後中華民国政府の台湾移転とともに中国大陸から移住した人々のこと。

今年1月にね、台湾に行ったんですよ。観光バスに乗ったらね、「自分たちは本省人だ、外省人とは全然違う」と。で、「馬英九っていうのは中国にすり寄ってダメだ」、「自分たちは台湾人の政府を作りたい」と言ってましたね。李登輝はね、台湾人の民族主義に芽生えてる人だからね。バスガイドは非常に激しい口調で言ってましたね。本省人と外省人の違いを。

だから、沖縄と本土みたいなもんですよね。沖縄も「独立した方がいいよ」と言う人もいるし、台湾もそういう人いるし。「いや、独立してはダメだ、一つだ」と言う人もいるしな。台湾も、「台湾と中国は一緒だ」と言うのもいるしな。割と境遇は似てるんじゃないですか。向こうは、昔は「小琉球」ですからね、台湾はね。

菅野　沖縄が「大琉球」で。

伊志嶺　そうそう。(笑い)

菅野　それでは長時間にわたってお話しいただきましたが、この辺で終わらせていただきます。お話しいただき本当にありがとうございました。

おわりに：戦後に引き直された境界と沖縄・台湾・アメリカ

以上、伊志嶺朝三氏のオーラルヒストリー・インタビューでは、戦前戦後の沖縄、日本統治下の台湾、そして戦後の引き揚げと米留後の台湾訪問のエピソードが語られている。その回想には多くの興味深い内容が含まれているが、最後に、本資料から筆者が指摘しておきたい意義について、次の三点を挙げてまとめとしておきたい。

第一点は、沖縄人の憧憬の地としての台湾の存在である。この点について、伊志嶺氏が「沖縄の優秀な、特に宮古のね、優秀な連中がそこに行って勉強してると。そういう話聞いて、憧れの地でもあったわけですね」(75頁参照)と語っていたように、植民地であった台湾は沖縄よりもはるかに近代化された都会であり、勉学面において上昇志向のある伊志嶺氏の「憧れの地」であった。台湾到着時に兄の口からついて出た「宮古の言葉をあまり話すな」という忠告も、台湾人の子から発せられた「琉球」の呼びかけのなかに感じ取った違和感も、例え台湾が植民地であっても、ここでは母語に代表されるような自身の文化的属性が、他との比較において決して優位性を持つものではないことを認識させるものであった。

しかしながら、「だから両極端ですよね。『生蕃人』の首切り族がいる国っていうのと、学問的に優れた、台北[帝国]大学ね、台北師範、台北高専、色々とそんなのがあって」(75頁参照)という伊志嶺氏の語りは、当時の台湾イメージが両面性を有していることへの理解を示している点で重要である。そうした相反する台湾イメージは、未開の地を近代化させていった日本による近代化の功績をいっそう強調させ、日本人の台湾統治の正当性を強化するものであったのかは定かではないが、少なくとも「憧れの地」としての台湾への越境

は、自身のより良い進学や社会的上昇の機会を求めるうえでの越境の重要性を伊志嶺氏に確信させ、その後の越境を促進させることになったように思われるのである。

第二点は、疎開経験が土台となった戦後台湾社会への理解である。ここでは、戦後の台湾に戻った際に感じた「エリートと庶民の違い」という形容による「外省人と本省人の違い」について注目したい。少なくとも伊志嶺氏が琉球開発金融公社在籍中に再訪問した1960年代当時においては、中華民国政府の人材登用において、「大陸反攻」を掲げ、「中国全土の人材を登用した政府」であることを内外に示すうえでも中央政府の構成者は圧倒的に外省人であった。こうしたエスニシティの差異に敏感でありえたことについても、疎開中に台湾語を覚え、「戦時中の台湾は庶民」という実際の生活体験を基にした記憶があったからこそ、戦後に外国となったとはいえ、台湾社会に対する的確な理解につながったといえるだろう。

また、台湾で映画鑑賞をした際のエピソードも重要である。日本映画や宝田明が人気を博していた状況[15]や、「映画始まる前に皆起立して国歌歌うんですよね。今はもうそういうことないらしいんだけどもね。で一緒に大きな声で『三民主義(サンミンジューイー)〜』って歌ってね」(86頁参照)という回想では、戦後台湾で映画上映の際に実施されていた国家斉唱制度が紹介されているが[16]、現地住民と一緒に中華民国国歌を大声で斉唱したという回想は注目に値する。一般の外国人旅行者のリアクションとは一線を画していた伊志嶺氏の中華民国国歌斉唱という行為は、台湾接収時の転換期に教育を受けたことで刻まれた、元疎開者としての独自の記憶によって呼び覚まされた身体反応であった。戦後台湾社会を構成する主体と歴史観は多様性を帯びているが[17]、そうした多様性を理解し、本省人／外省人の関係、台湾／中国の関係性を沖縄と本土の関係性に引き付けて考えることのできる当事者性を身に付けることができたのには、疎開経験によって築かれた土台が果たした役割を見ることができると考えられるのである。

(15) 宝田明が香港女優の尤敏と共演していた映画には、『香港の夜』(1961年)、『香港の星』(1962年)、『ホノルル・東京・香港』(1963年)がある。また、「反共抗ソ」下の台湾にあって容認された反共陣営側の日本の映画が台湾を席巻していた状況については、三澤真美恵の論稿を参照されたい。三澤真美恵「「戦後」台湾での日本映画見本市:1960年の熱狂と批判」坂野徹、慎蒼健編『帝国の視角／死角:<昭和期>日本の知とメディア』青弓社、2010年、207–242頁。

(16) 1952年から1990年代中期まで、台湾の映画館では国民の愛国精神を養い国民統合を促進させる目的において、本編上映の前に中華民国国歌の起立斉唱が実施されていた。三澤真美恵「戦後台湾の映画館における国歌フィルム上映プログラムの確立」『日本台湾学会報』18号、2016年、63–85頁。

(17) 1945年の日本敗戦により台湾は中華民国の一省となったが、1949年に国共内戦に敗れて台湾に逃れてきた蒋介石および中国国民党は、自らを唯一の中国の正統政府であるとして「大陸反攻」を掲げ、「反共中国人化」教育が実施され続けた。しかし、中華民国初の台湾人(本省人)総統となった李登輝時代(1988–2000)には、台湾の郷土教育が義務教育制度に導入され、次第に中国とは異なる独自の台湾(人)意識が強まることとなった。その後、かつて「台湾独立」を党是に掲げていた民主進歩党(民進党)が2000年および2016年の二度にわたって政権交代を果たしたことは、中国との統一と独立をめぐる問題(統独問題)に対する台湾住民の意識が多様であることを表している。

第三点は、沖縄・台湾・アメリカでの異なる境界越境の際に現出した台湾疎開時のつながりである。台湾疎開に始まったといえる伊志嶺氏の越境体験は、日本敗戦後には、それまで同じ帝国内での移動であった「沖縄(宮古)－台湾間の移動」から、一転して今度は「中華民国統治下の台湾から米軍政下の沖縄(宮古)への移動」に変容した[18]。同じ日本国内であった二地域の「戦後」を生きることとは、日本敗戦によって中華民国とアメリカという、異なる国家の統治下に置かれたために眼前に立ち現れることとなった――とはいえ、冷戦下西側陣営の下で固く結びついた――境界の越境を意味していた。

伊志嶺氏の場合、台湾から宮古に引き揚げた後、1950年代初頭に大学進学による「米軍政下の沖縄から日本へ」、卒業後は沖縄本島に移動し、1950年代末から60年代頭への転換期に大学院進学による「米軍政下の沖縄から米国50番目の州に昇格したハワイへ」、1960年代初頭に公務による「米軍政下の沖縄から中華民国統治下の台湾へ」といった越境の流れが語られている。なかでも、琉球開発金融公社在籍時の伊志嶺氏が、公務出張で再訪することとなった台湾で、疎開時代の隣人の家を偶然にも通過したことで果たされた再会や、会議で赴いた台湾大学で米留時代のハワイ大学の同級生と偶然にも鉢合わせしたエピソード[19]は、それが意図せぬ巡り合わせであっただけに印象的であるが、そもそも、「沖縄－日本本土」、「沖縄－ハワイ」、「沖縄－台湾」という、沖縄から三地域への越境の始まりは、疎開による「沖縄(宮古)－台湾」の越境であった。1944年の「沖縄－台湾」の越境を出発点として、約20年後に再び「沖縄－台湾」の越境が巡ってきた際の偶然の再会は、わずかにも思えたかつての台湾滞在経験であっても、伊志嶺氏が認めるように「その後も大きな影響」を及ぼし、氏の人的つながりと移動空間の広がりにとって、その土台を形成する重要な起点となったことの証左であったといえよう。

最後に、本オーラルヒストリーの資料としての注意点を挙げたい。第一に、本資料は「集団疎開者」よりは経済的に恵まれた状況にあった「縁故疎開者」の経験という点である。文中にもあるように、姉が台湾の疎開先で小学校の教師として就職することができ、台湾の地元民から食料と引き換えに交換していた姉の着物の数もある程度の余裕があったことがうかがえるなど、集団疎開者とは異なり、病気や飢えに見舞われ死を覚悟するまでの状況にはいたっていなかった点は留意すべきであろう。縁故疎開ではなく、集団疎開者として台湾に渡った人々には、生活の基盤を持たない台湾という異郷の地で困窮をきわめ、マラリアなどで命を落とした者もいたことから、疎開者の経験にも多様性があることに無自

(18)　ただ、正式に「南部琉球陸軍政府」が宮古に設置されたのは1945年12月のことであり(1950年6月には「宮古軍政府」となる)、終戦からそれまでの機関は「八重山自治会」が秩序維持にあたっていた。中野育男「米国統治下沖縄の軍政から民政への移行」『専修商学論集』92号、2011年1月、73頁。

(19) これについては、1949年の中華人民共和国建国によって外国人研究者による中国大陸での実地調査がほぼ不可能となったため、中国語を学び、中国社会を研究するためには、好むと好まざるとにかかわらず、台湾(もしくは香港)という選択肢しか残されていなかった、冷戦下東アジアをとりまく学術状況を反映するものでもあった。

覚になってしまった場合、一面的な把握は単純化された理解に止まる危険性を孕んでおり、注意が必要である[20]。

上記のような注意点もあるとはいえ、上述した伊志嶺氏の台湾疎開から始まった移動の経験の語りを通じて、沖縄と台湾の人の移動とそれにまつわる個人的体験や、国境の変容がもたらした変化などに関する聞き取りの記録化だけに止まらず、沖縄と台湾の関係性とその結びつきのあり様を考えることの意義は少なくないであろう。それは、伊志嶺氏一人の語りだけからも、戦後の沖縄社会を生き、支えていったあらゆる層において、かつての台湾疎開の経験が脳裏に深く刻まれていることが理解できるからである。そして何より、その程度は異なるにせよ、かつての台湾疎開の経験が、境界を越えて、戦後の沖縄人と台湾とのつながりを形成する土台となる役割を果たした、そうした可能性が示唆されているように思われるからである。

(付記)本資料は匿名の査読者から非常に有意義なご指摘・ご意見を数多く賜った。この場をかりて厚くお礼申し上げたい。なお、本資料は、科学研究費補助金(課題番号：25257009)による成果の一部である。

(20) 松田良孝によれば、一例として1944年後半に台中州南投郡南投街に居住していた沖縄の集団疎開者の死亡率が8.55パーセント(152人中死亡者13人、特に幼児の死亡率が高かった)であったことが挙げられており、病気や食料不足などから、集団疎開者の死亡率は少なくなかった点が指摘されている。松田、『台湾疎開』(前注3参照)、104–105頁。とはいえ、伊志嶺氏の兄も栄丸事件で命を落としているように、戦中戦後の混乱期にあっては、集団疎開であれ縁故疎開であれ、生命の危険は常に隣り合わせであったともいえよう。